
ERU 炎の木と街

鬼雨羅 愛夜女

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ERU 炎の木と街

【Nコード】

N9272A

【作者名】

鬼雨羅 愛夜女

【あらすじ】

エルこと枝江狸流雨夜えいりるつやが主人公の物語です

PROLOGUE

「よしっ」

仮面をつけた男が言った

仮面には「ERU」とかかかれている

「任務完了だ」

昼休み

「ふわあ〜っ眠い」

流雨夜が不平を洩らした

枝江狸ええり 流雨夜なるつや

高校 1年B組 バスケ部

名前が読みにくいから「エル」でとおっている、教師達もだ

髪の毛の色は生まれた時から上が白、下が黒だった

一度髪の毛を染めようとしたが、染まらなかった

昼ご飯を買いに購買へ行こうと思って席を立ったとき

「エルっ」

と草水くさみず 五郎ごろうが言いながら近寄ってきた
五郎とは中1の時から知り合いだった
「なんだ？」

五郎は口を尖がらしてこう言った

「昨日電話出なかつたろ？」

「昨日電話したのか？」

流雨夜が聞くと五郎は又、口を尖がらせて言った

「明後日の試合見に行くのか？って聞こうと思ってた」
五郎もバスケ部だ

「へえーっ 試合あるのか」

「行かねえの？」

今度は口をへの字に曲げて言ってきた

「ああ行かねえ、用事がある」

「そうかあ」

残念、と言う顔をした

「もう行っていいか？」

流雨夜が聞いた

「え？何所行くの？」

「購買」

流雨夜が教室のドアの方へ歩いていこうとした時

「おっ俺も行く、焼きそばパンまだ売ってるかな？」

「さあな」

と言う会話を変わしながら2人は教室を出た

屋上

「なあなあ エルウ」

五郎が変な声で流雨夜を呼んだ

「なんだ？」

流雨夜は購買で買った、コロッケパンをかじった

「明後日の用事って何？」

五郎が聞いてきた

「家庭の事情」

「へえ」

五郎が横でぶつぶつ言い始めた

「あてる気か？」

流雨夜は聞いてみた

「違うよお」

「ならいい」

ブブブブブブブ

携帯がなった（バイブ音）

流雨夜の携帯だった

「ごめん」

と言いながら立ち屋上のドアの方へ行った

そして電話に出た

2秒ほどして

「大統領！！！」

と叫んでしまった

五郎が大統領？、と首をかしげていた

「今から行きます」

と言って電話を切った

五郎の方へ戻って

「悪い五郎、早退する、と伝えといてくれ」

「うん、いいけど、だいたい………」

すると流雨夜はコロッケパンを口ではさんで屋上を出た

階段を駆け下り下靴に履き替えた

校門に向かつて全速力で走った

走っている途中でコロッケだけが落ちた

「はんがはひへはほっへ（こんな時にかぎって）！」

と言いながら門を飛び越えた

PROLOGUE (後書き)

一話目からは、流雨夜のことをエルにします
お気を付けを

One episode

古い工場に着いた

「KAZAKI、遅れた・・・すまない」

KAZAKIと言う、茶髪だ

「いいよ、ERU」

ERUとはエル（流雨夜）の事だ

髪の毛がなぜか白い、それに仮面をしている

「ERU」とかかれた仮面を・・・

「皆、ERUが来たぞ」

KAZAKIが小さいながらもみんなに聞こえる程度の声を出した

「よっしゃ、これでいけば勝ったも同然だ」

男が言った

MAMIYAと言う赤い髪だ

「MAMIYAはしゃぎすぎ、敵にきずかれる」

こっちの女はRENAN、黄色だ

「じつごめん」

「じゃあ行こう、BAD WHITE」

2時間後

「やっぱERU強すぎ」

IYOと言う男が言った、髪が灰色だった

「バスケやってから」

「RYUもバスケやってたのにえらく違うワア」

SAMIと言う女が言った、緑だ

「あはは」

エルは軽く流した

エルは「BAD WHITE」と言うチームの頭だった
ある人に「こいつらを倒して」と言われたら即効やる

「ただの暴力団」といえばそうかもしれないが

これには国も関係している

いまやったのだって頼まれてやった事だ

報酬金は、大の大人が一年掛けて入るくらいのお金だ
皆自分の名前が入った仮面を付けている

名前と言っても少々ひねっている

たとえばKAZAKI

本当の名前は風波かせなみ 斬朗きろうだ

それがこのチームのルールだった

チーム全員が家へ帰宅した

「コロッケもつたいなかったな」

エルが家の戸を開けながら呟いた
中に入り洗面所へ向かう

日課だ

服を脱ぎ普段着に着替え、台所へ向かい
冷蔵庫を開け、麦茶を取り出した

One episode (後書き)

見てくれてありがとうございます

Two episode

エルはテレビをつけた
天気予報をしていた

「明日、晴れか・・・」

独り言を言っ手て手に持っていた麦茶を飲んだ
その時

ブルルルルルルルルルル

電話が鳴った

エルは受話器をとった

「もしもし？枝江狸ですけど？」

「たっ助けてくれエエエっ」

大声で叫ばれた

耳がキ
ンとなった

「どなたですか？」

エルが聞く

「とっ、とにかく

言葉が切れた

エルは受話器を耳にぎゅっと押し当てた

向こうでプシユウウウウ　　と言つ音が聞こえている

「あのお？」

エルがこういつた瞬間

「ふっふははははははははははっ」

笑い声が聞こえた

男だ

「これで炎の国を・・・さくな様に」

炎の国？どこだ？

「炎警察も腕が落ちたものね・・・ふふっ」

女の声が聞こえる

「こいつ、応援を呼んでたみたいだぞ？」

又男の声が聞こえた

男と女がいるようだ

「もっしも しつ警察ですかあ？」

女だ

エルは何も言えず黙っていた

「返事がなあい」

女が言う

「かりん、切って」

男が言う

「はーいっ」

かりんと呼ばれた女がこう言ったとたん

電話は切られた

「なんだ？いまの？炎の国？」

頭がこんがらがったが

「まっいつか」

と、間違い電話ということに頭を切り替えた

4日後

「エルウ」

五郎が来た

「最近顔色悪いよ？大丈夫？」

「大丈夫、ゴホッゲホッ、だ」

「風邪引いててるんじゃない？」

五郎が首をかしげて言う

「大丈夫だ」

もう一度言った

「あつ今日家行つていい？」

五郎が聞く

「なんでだ？」

「遊ぼうよ、明るく楽しくパーっと」

五郎が手をヒラヒラと空中を泳がせた

「いいぞ」

「やったー」

五郎が飛び跳ねた

Two episode (後書き)

なんか意味不明になってきました(汗

Three episode

「ひっ！人暮らしっ?!」

五郎がビククリした顔をずいっと向けてきた

「あっああ」

「いいなあ俺も」

五郎は喋るのをやめてエルのほうをじっと見ている

「どうした？俺の顔に何か」

「エツエルの後ろに……!?!」

五郎が言った

「え!?!」

つと言つてエルは振り返つた

その時

「うそだよおおっエルつてば引つかかっちゃって……面白い!」
五郎がにこつと笑つた

「くっ……五郎、お前……」

ブルルルルル

電話が鳴つた

「エル電話だよ?」

「それぐらい分かつてる!」

エルは怒鳴つた

それと同時に受話器を取つた

「レッドちよつと聞いてくれる?」

女の声が聞こえた

「は?」

エルは妙な声をだした

「闇の奴らめつつ炎だけじゃなく、水や草までにも手を出しているのよ!?!」

女が言った

「あの？誰ですか？」

エルが聞いた

すると後ろで五郎が

「間違い電話？」

と聞いてきた

「あつレッドじゃない？もしかして間違えたのかも、じゃ、スイマ
セン」

といわれて一方的に切られた

「なんだったの？」

五郎が聞いてきた

「間違い電話・・・」

エルはそう短く言った

ピンポン

インターホンがなった

「ちょっと待っててくれ」

エルはそう言うのと玄関へ走って行った

ガチャッ

ドアを開ける

そしたら

「ERU・・・」

女が居た

「RENAN??」

Three episode (後書き)

感想とかあったら書いてってください

Four episode

「エルーっあの子寝てるよおお」

五郎がエルのほうに向かいながら言った

「ねーねー、あの子誰？」

五郎が聞いてきた

五郎にはまだ「BAD WHITE」の事は話してはいない
その前に一般人には話してはいけない事になっている

「え・・・っと」

エルが誤魔化しに入ろうとした時

「E・・・ERU・・・」

RENNANが起きた

そしてこう言った

「皆・・・殺されちゃった・・・」

エルは目を丸くした

RENNANの方へ近づいた

「みつ皆って？」

エルは恐る恐る聞いた

「「BAD WHITE」・・・私とERU以外・・・全員・・・」

RENNANはこう言う声をあげて泣いた

「うつ嘘だろ？・・・全滅なんて?!誰に・・・?誰に?」

エルは独り言のように言った

五郎は場の空気が重くて口が開けなかった

あと口が少し笑っていた

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

地面が鳴っている

っ

そのうちRENNANとエルの上に蒼い珠がボンッと出てきた

「うっ」

エルはその場から離れた

珠にひびがはいった

その瞬間地面の音が止んだ

その次に珠がバリントンと割れた

そこから真つ赤な髪をした小さい女の子が出てきてこう言った

「なんだ？弱そうだな」

その言葉にエルはカチンときた

女の子はエルと五郎とRENNANをジイッと見た

「こいつ等が、ルヴァン？？笑えるなっ」

女の子があははと大きな声を出して笑った

ついにエルは怒鳴った

「おめえ誰だよ？？何しにきた??？」

「私か？私は炎の国の紅 火野と言う」

火野と言う女の子はすらすらと喋った

「ほっ炎の国??？」

エルは驚いた

そう、炎の国とは4日前に家に電話がかかって来たときに男と女が喋っていたことだ

「そうだ、何をしに来たかを言おう」

火野は少し間を置いてから話した

「お前達を炎の国へ飛ばすためここへ来たんだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9272a/>

ERU 炎の木と街

2011年1月13日14時23分発行